

春着

泉鏡太郎

青空文庫

あら玉の春着きつれて酔ひつれて

少年行と前がきがあつたと思ふ……こゝに拜借をしたの

は、紅葉先生の俳句である。處が、その着つれてとある春着

がおなじく先生の通帳を拜借によつて出來たのだから

妙で、そこが話である。さきに秋冷相催し、次第に朝夕

の寒さと成り、やがて暮が近づく、横寺町の二階に日が當つ

て、座敷の明い、大火鉢の暖い、鐵瓶の湯の沸つた時を見計

らつて、お弟子たちが順々、かく言ふそれがしも、もとより

で、襟垢、膝ぬけと言ふ布子連が畏まる。「先生、小清

潔とまゐりませんでも、せめて縞柄のわかりますのを、新年

は一枚と存じます……恐れ入りますが、お帳面を。」

「また濱野屋か。」神樂坂には、他に布袋屋と言ふ——今もあらう——呉服屋があつたが、此の濱野屋の方の主人が、でつぷりと肥つて、莞爾々々して居て、布袋と言ふ呼稱があつた。

が、太鼓腹を突出して、でれりとして、團扇で雛妓に煽がせて居るやうなのではない。片膚脱ぎで日置流の弓を引く。獅子寺の大弓場で先生と懇意だから、従つて弟子たちに帳

面が利いた。たゞし信用がないから直接では不可いのである。

「去年の暮のやつが盆を越して居るぢやないか。だらしなく飲みたがつてばかり居るからだ。」「は、今度と言ふ今度は……」
「お株を言つてら。——此の暮には屹と入れなよ。」——その癖、

ふいと立つて、「一所いっしょよに來きな。」で、通とほりへ出でて、右みぎの濱野屋はまのやで、
 御自分ごじぶん、めいゝくに似合にあふやうにお見立みたて下くだすつたものであつた。
 此この春着はるぎで、元ぐわんじつ日じつあたり、大たいして酔よひもしないのだけれど、
 目つきめと足あしもただけは、ふらくしごにんせろと四五人揃そろつて、神樂坂かぐらざかの通とほ
 りをはしやいで歩ある行く。……若わかいのが威勢ゐせいがいゝから、誰だれも（帳ち
 面やうめん）を着きて居ゐるとは知しらない。いや、知しつて居ゐたかも知しれな
 い。道理だうりで、そこらの地内ちないや横よこ町ちやうへ入はひつても、つきとほしの
 筭かうがいつまで、棲とを取とつて、羽子はねを突ついて居ゐるのが、聲こゑも掛かけはしなかつ
 た。割前わりまへ勘定かんぢやう。乃すなはち蕎麥屋そばやだ。と言いつても、松まつの内うちだ。もり
 にかけとは限かぎらない。たとへば、小栗をぐりがあたり芋いもをすゝり、柳やなが
 川はがはしらを撮つまみ、徳田とくだがあんかけを食たべる。お酌しやくなきが故ゆゑに、

あへ^{あへ} 敢て世間は怨まない。が、各々その懐中に對して、憤懣
 ふへい^{ふへい} 不平勃々たるものがある。従つて氣焰が夥しい。

此のありさまを、高い二階から先生が、

あら玉の春着きつれて酔ひつれて

涙ぐましいまで、可懐い。

牛込の方へは、随分しばらく不沙汰をして居た。しばらく

と言ふが幾年かに成る。このあひだ、水上さんに誘はれて、

神樂坂の川鐵（鳥屋）へ、晩御飯を食べに向いた。もう

一人お連は、南榎町へ浅草から引越した万ちゃん、二

人番町から歩行いて、その榎町へ寄つて連立つた。が、

あの、田圃の大金と仲店のかねだを橋がかりで歩行いた人が、

しかも當^{たうじつ}日の發^{ほつきにん}起^{にん}人^だと言^いふからをかしい。

途^{とちう}中^{なんどまちへん}お納^{せま}戸^{みち}町^ち邊^ちの狭^{しち}い道^{はちじつしやくきつた}で、七^{しち}八^{はち}十^{じつ}尺^{しやく}切^{きつ}立^たての白^{しろ}煉^{れん}瓦^{ぐわ}

に、崖^{がけ}を落^おちる瀑^{たき}のやうな龜^{ひゞ}裂^ぎが、枝^{えだ}を打^うつて、三^み條^{すぢ}ばかり頂^{てつぺ}

邊^んから走^{はし}りかゝつて居^ゐるのには肝^{きも}を冷^{ひや}した。その眞^ま下^{した}に、魚^{さかな}屋^や

の店^{みせ}があつて、親^{おやかた}方^ゐが威^ゐ勢^{せい}のいゝ向^む願^{かう}卷^{はちまき}で、黄^き肌^{はだ}鮪^だにさ

しみ庖^{ばう}丁^{ちやう}を閃^{ひらめ}かして居^ゐたのは偉^{えら}い。……見^みた處^{ところ}は千^{せん}丈^{ぢやう}の

峰^{みね}から崩^{くづ}れかゝる雪^{ゆき}雪^{なだれ}類^{れい}の下^{した}で薪^{たきぎ}を樵^こるより危^{あぶ}かしのに――

此^この度^ど胸^{きよう}でないと復^{ふく}興^{こう}は覺^{おぼ}束^{つか}ない。――ぐらくくと來^くるか、

おツと叫^{さけ}んで、銅^{どう}貨^{くわ}の財^{さい}布^ふと食^{しよく}麵^{めん}麩^ぼと魔^ま法^{はふ}壇^{たん}を入^いれたバス

ケツトを追^{おつ}取^{とり}刀^{がたな}で、一^{いち}々^く框^{かまち}まで飛^とび出^だすやうな卑^ひ怯^{けふ}を何^どう

する。……私^{わたし}は大^{おほい}に勇^{ゆう}氣^きを得^えた。

が、吃驚するやうな大景氣の川鐵へ入つて、たゞきの側
の小座敷へ陣取ると、細露地の隅から覗いて、臆病神が顯は
れて、迷路を探せや探せやと、電燈の瞬くばかり、暗い指さ
しをするには弱つた。まだ積んだまゝの雑具を繪屏風で劃つて
ある、さあお一杯は女中さんで、羅綾の袂なんぞは素よりない。
たゞしその六尺の屏風も、飛ばばなどか飛ばざらんだが、
屏風を飛んでも、駈出せさうな空地と言つては何處を向いても
無かつたのであるから。……其の癖、酔つた。酔ふといふ心
持に陶然とした。第一この家は、むかし蕎麥屋で、夏は三
階のもの干でビールを飲ませた時分から引續いた馴染なので
ある。——座敷も、趣は變つたが、そのまゝ以前の俵が俵ばれる。

……名ぶつの額がある筈だ。横額に二字、たしか（勤儉）とかあつて（彦左衛門）として、圓の中に、朱で（大久保）と云ふ印がある。「いかものも、あのくらゐに成ると珍物だよ。」と言つて、紅葉先生はその額が御贖買だつた。——屏風にかくれて居たかも知れない。

まだ思ひ出す事がある。先生がこゝで獨酌……はつけたりで、五勺でうたゝねをする方だから御飯をあがつて居ると、隣座敷で盛んに艶談のメートルを揚げる聲がする。紛ふべくもない後藤宙外さんであつた。そこで女中をして近所で焼芋を買はせ、堆く盆に載せて、傍へあの名筆を以て、曰く

「御浮氣どめ」おんうはき プンと香つて、にほ 三筋ばかり蒸氣の立つ處を、あ
 ちら様から、さま おつかひもの、と持つて出た。本草には出て居ま
 いが、案ずるに焼芋と餡パンは浮氣をとめるものと見える……
うはき が浮氣がとまつたか何うかは沙汰なし。たゞ坦懐なる宙外
いくん 君は、此盆を譲りうけて、其のままに彫刻させて掛額に
 したのであつた。

さて其夜こゝへ來るのにも通つたが、矢來の郵便局の前で、
そのよ ひとりで吹き出した覺えがある。最も當時は青くなつて怯えたの
 で、おびえたのが、尚ほ可笑い。まだ横寺町の玄關に居た
とき 時である。「この電報を打つて來た。巖谷の許だ、局待に

して、返辭へんじを持つて歸かへるんだよ。急いそぐんだよ。」で、局きよくで、局きよく
 待まちと言いふと、局きよく員ゐんが字數じすうを算かぞへて、局きよく待まちには二字分にじぶんの
 符號ふがうがある。此このまゝだと、もう一音信いちおんしんの料金れうきんを、と言いふの
 であつた。たしか、市内しんないは一音信いちおんしん金五錢きんごせんで、局きよく待まちの分ぶんとも
 で、私わたしは十錢じつせんより預あづかつて出でなかつた。そこで先せん生せいの草したがきを
 見みると「キルナラタツネル」一字いちじのことだ。私わたしは考かう一いつ考かうして而しか
 して辭句じくを改あらためた。「キルナラサガス」此これなら、局きよく待まちの二に
 字分じぶんがきちんと入はひる、うまいでせう。——巖谷いはやし氏の住所ぢうしよは其その
 頃ころ麴かうち町まち元園もとぞのちやう町まちであつた。が麴かうち町まちにも、高輪たかなわにも、
 千住せんぢゆにも、待まちつこと多時たじにして、以上いじやう返電へんでんがこない。今いまど
 時きとは時代じだいが違ちがふ。山やまの手ての局閑きよかんにして、赤城あかぎの下したで鷄とりが鳴なく

のをぼかんと聞いて、うつとりとしてみると、なゝめ下りの坂の下、あまぎけやの町の角へ、何と、先生の姿が猛然としてあらはれたらうではないか。

唯見て飛出すのと、殆ど同時に「馬鹿野郎、何をして居る。まるで文句が分らないから、巖谷が俵で駈けつけて、もう内へ來てゐるんだ。うつそりめ、何をして居る。皆が、車に轢かれやしないか、馬に蹴飛ばされやしないかと案じて居るんだ。」私は青くなつた——（居るなら訪ねる。）を——（要るなら捜す。）——巖谷氏のわけの分らなかつたのは無理はない。紅葉先生の辭句を修正したものは、恐らく文壇に於て私一人であらう。そのかはり目の出るほどに叱られた。——何、五錢ぐらゐ、自分の

小遣こづかひがあつたらうと、串じょうだん戲ぎをおつしやい。それだけあれば、もう早くはやに煙草たばこと焼芋やきいもと、大福餅だいふくもちになつて居ゐた。煙草たばこ五ご匁もんめ一いつ錢せん五ご厘りん。焼芋やきいもが一いつ錢せんで大六切だいむきれ、大福餅だいふくもちは一いち枚まい五ご厘りんであつた。——其處そこで原稿料げんかうれうは？……飛とんでもない、私わたしはまだ一枚まいも稼かせぎはしない。先生せんせいのは——内ない々く知しつてゐるが内ない證しょうにして置おく。……

まだ可笑をかしい事ことがある、ずツと後あとで……此この番ばん町ちやうの湯ゆへ行ゆくと、かへりがけに、錢湯せんたうの亭主ていしゆが「先生せんせい々々」丁ちやうど午ひるごろだから他ほかに一人ひとりも居ゐなかつた。「一寸ちよつとお教をへを願ねがひたいのでございますが。」先生せんせいで、お教をへを、で、私わたしはぎよつとした。亭て主しゆ極きはめて慇懃いんぎんに「え、（おかゆ）とは何どう書かきますでせうか

。「あゝ、其れはね、弓、弓やつて、真中へ米と書くんです。弱しと間違つては不可いのです。」何と、先生の得意想ふべし。實は、弱を、米の兩方へ配つた粥を書いて、以前、紅葉先生に叱られたものがある。「手前勝手に字を拵へやがつて——先人に對して失禮だ。」その叱られたのは私かも知れないが、其の時の覚えがあるから、あたりを拂つて悠然として教へた。——今はもう代は替つた——亭主は感心もしないかはりに、病身らしい、お粥を食へたさうな顔をして居た。女房が評判の別嬪で。——此のくらゐの間違ひのない事を、人に教へた事はないと思つた。思つたなりに年を経た。實際年を経た。つい近い頃である。三馬の浮世風呂を讀むうちに、だし

ぬげに目白の方から、釣鐘が鳴つて來たやうに氣がついた。湯屋の聞いたのは（岡湯）なのである。

少々話が通りすぎた、あとへ戻らう。

其の日、万ちやんを誘つた家は、以前、私の住んだ南榎

町と同町内で、奥へ辨天町の方へ寄つて居る事はすぐ

に知れた。が、家々も立て込んで、従つて道も狭く成つたやう

な氣がする。殊に夜であつた。むかし住んだ家は一寸見富が

着かない。さうだらう兩側とも生垣つゞきで、私の家など

は、木戸内の空地に井戸を取りまいて李の樹が幾本も茂つて居

た。李は庭から背戸へ續いて、小さな林といつていゝくらゐ。あ

の、底そこに甘みあまを帯おびた、美人びじんの白しろい膚はだのやうな花はな盛さかりを忘わすれな
い。雨あめには惱なやみ、風かぜには傷いたみ、月影つきかげには微ほ笑ゑんで、淨じやう濯たくめい明
粧しやうの面影おもかげを匂におはせた。……

唯一たゞひとま間まよりなかつた、二階にかいの四疊よで半はんで、先せん生せいの一句いっくがある。

紛ふん胸きようの乳房ちゆうぶさかくすや花はな李すもも

ひとへに白しろい。乳ちゆうくびの桃もも色いろをさへ、蔽おほひかくした美び女ぢよにく

らべられたものらしい。……此この白しろい花はなの、散ちつて葉はに成なる頃ころの、

その毛蟲けむしの夥おびた多たしさと云いつては、それまたは又またない。よくも、あ

水みづを飲のんだと思おもふ。一釣瓶ひとつるべごとえのきに榎えの實みのこぼれたやうな赤あかい

毛蟲けむしを充いっ満ぱいに汲く上げた。しばらくすると、此この毛蟲けむしが、盡ことごとく眞ま

白しろな蝶てふになつて、枝えだにも、葉はにも、再ふたび花はな片なを散ちらして舞まつ

て亂るゝ。幾千とも數を知らない。三日つゞき、五日、七日つゞいて、飜り且つ飛んで、窓にも欄干にも、暖かな雪の降りかゝる風情を見せたのである。

やがて實る頃よ。——就中、南の納戸の濡縁の籬際に

は、見事な巴旦杏があつて、大きな實と言ひ、色といひ、艶な

る波斯の女の爛熟した裸身の如くに薰つて生つた。いまだ

と早速千匹屋へでも卸しさうなものを、彼の川柳が言ふ、

(地女は振りもかへらぬ一盛り) それ、意氣の壯なるや、縁

日の唐黍は買つて噛つても、内で生つた李なんか食ひはしな

い。一人として他様の娘などに、こだはるものはなかつたので

ある。

が、いまは開けた。その頃、友だちが来て、酒屋から麥酒を取ると、泡が立たない、泡が、麥酒は決して泡をくふものはない。が、泡の立たない麥酒は稀有である。酒屋にたゞすと、「抜く時倒にして、ぐんぐんお振りなさい、然うすると泡が立ちますよ、へい。」と言つたものである。十日、腹を瀉さなかつたのは僥倖と言ひたい——今はひらけた。

たゞ、惜しい哉。中の丸の大樹の枝垂櫻がもう見えぬ。新館の新潮社の下に、吉田屋と云ふ料理店がある。丁度あの前あたり——其後、晝間通つた時、切株ばかり、根が残つたやうに見た。盛の時は梢が中空に、花は町を蔽うて、そして地摺に枝を曳いた。夜もほんのりと紅であつた。昔よりして界

隈では、通寺町保善寺に一樹、藁店の光照寺に一樹、
 とともに、三枚振袖、絲櫻の名木と、稱へられたさう
 である。

むかがはの湯屋に柳がある。此間を、男も女も、一頃揃つ

て、縮緬、七子、羽二重の、黒の五紋を着て往き來した。

湯へ行くにも、蕎麥屋へ入るにも紋着だつた事がある、こゝだ

けでも春の雨、また朧夜の一時代の面影が思はれる。

つい、その一時代前には、そこは一面の大竹藪で、氣の

弱い旗本は、いまの交番の處まで晝も駈け抜けたと言ふので

ある。酒井家に入りの大工の大棟梁が授けられて開拓した。

藪を切ると、蛇の棄て場所にこまつたと言ふ。小さな堂に籠めて

まつ 祭つたのが、のちに倶楽部の築山の蔭に谷のやうな崖に臨んで
 あつたのを覚えて居る。池、亭、小座敷、寮ごのみで、その棟
 梁が一度料理店を其處に開いた時のなごりだと聞いた。

かけはしちん はるか 棧の亭で、遙にポン〜とお掌が鳴る。へーい、と母家から女
 よちう 中が行くと、……誰も居ない。池の梅の小座敷で、トーンと灰

ひふき た、おと 吹を敲く音がする、娘が行くと、……影も見えない。——その
 れうりや たぬき 料理屋を、狸がだましたのださうである。眉唾。眉唾。

もつと 尤もいま神樂坂上の割烹（魚徳）の先代が（威張り）

よ と呼ばれて、「おう、うめえ魚を食はねえか」と、酔ぱらつて居
 るから盤臺は何處かへ忘れて、天秤棒ばかりを振りまはして

歩行いた頃で。……

矢來邊の夜は、たゞ遠くまで、榎町の牛乳屋の納屋に、トーンくと牛の跫音のするのが響いて、今にも——いわしこ
う——酒井家の裏門あたりで——眞夜中には——鱗こう——と
みこゑよ三聲呼んで、形も影も見えないと云ふ。……怪しい聲が聞えさう
な寂しさであつた。

春の夜の鐘うなりけり九人力

それは、その李の花、花の李の頃、二階の一室、四疊半だ
から、狭い縁にも、段子の上の段にまで居餘つて、わたしたち八
人、先生と合はせて九人、一夕、俳句の會のあつた時、興
に乗じて、先生が、すゝ色の古壁にぶつつけがきをされたも

のである。句の傍に、おのくの名がしるしてあつた。……神
 樂坂うらへ、私が引越す時、そのまゝ残すのは惜かつたが、壁
 だから何うにも成らない。——いゝ鹽梅に、一人知り合があと
 へ入つた。——埃は掛けないと言つて、大切に居た。

——五月雨の陰氣な一夜、坂の上から飛蒐るやうなけたゝま
 しい蹠音がして、格子をがらりと突開けたと思ふと、神樂坂
 下の其の新宅の二階へ、いきなり飛上つて、一驚を吃
 した私の机の前でハタと顔を合はせたのは、知合のその男で：
 ……眞青に成つて居る。「大變です。」「……」「化ものが出
 ます。」「……」「先生の壁のわきの、あの小窓の處へ机を置
 いて、勉強をして居りますと……恚う、じりりと燈が暗く

成りますから、ふいと見ますと、障子の硝子一杯ほどの猫の顔が、「と、身ぶるひして、「顔ばかりの猫が、李の葉の眞暗な中から——其の大ききと言つたらありません。そ、それが五分と間がない、目も鼻も口も一所に、僕の顔とぴつたりと附着きました、——あなたのお住居の時分から怪猫が居たんでせうか：——一體猫が大嫌ひで、いえ可恐いので。」それならば爲方がない。が、怪猫は大袈裟だ。五月闇に、猫が屋根をつたはらないとは誰が言ひ得よう。……窓の燈を覗かないとは限らない。しかし、可恐い猫の顔と、不意に顔合せをしたのでは、驚くも無理はない。……「それで、矢來から此處まで。」「え。」と息を引いて、「夢中でした……何しろ、正體を、あなたに

うかゞ 伺はうと思つたものですから。「今は昔、山城介三善春家は、
 まへよ 前の世の蝦蟆にてや有けむ、蛇なん極く恐ける。——夏の比、
 そめどの たつみやま 染殿の辰巳の山の木隠れに、君達、二三人ばかり涼んだ中
 はるいへ まじ に、春家も交つたが、此の人の居たりける傍よりしも、三尺
 くぼか 許りなる烏蛇の這出たりければ、春家はまだ氣がつかかなか
 つた。ところ きみたち 處を、君達、それ見よ春家。と、袖を去る事一尺
 はるいへ かほ ばかり。春家顔の色は朽し藍のやうに成つて、一聲あつと叫
 びもあへず、立たんとするほどに二度倒れた。すはだしで、その
 そめどの ひがしもん 染殿の東の門より走り出で、北ぎまに走つて、一條より西へ、
 にしとうあん 西の洞院、それから南へ、洞院下に走つた。家は土御門
 しとうあん 西の洞院にありければで、駈け込むと齊しく倒れた、と言ふ

のが、今昔物語りに見える。遠きその昔は知らず、いまの男
 は、牛込南榎町を東状に走つて、矢來中の丸より、
 通寺町、肴町、毘沙門前を走つて、南に神樂坂上を
 走りおりて、その下にありける露地の家へ飛込んで……打倒れ
 けるかはりに、二階へ駈上つたものである。餘り眞面目だから
 笑ひもならない。「まあ、落着きたまへ。——景氣づけに一杯。」
 「いゝえ、歸ります。——成程、猫は屋根づたひをして、窓を
 覗かないものとは限りません。——分りました。——いえ然うし
 ては居られません。僕がキヤツと言つて、いきなり飛出したもん
 ですから、彼が。」と言ふのが情婦で、「一所にキヤツと言つ
 て、跣足で露地の暗がりを飛出しました。それつ切音信が分り

ませんから。「慌あわてて歸かへつた。——此この知しり合あひを誰たれとかする。や
 がて報ほう知ち新聞しんぶんの記者きしや、いまは代議士だいきしである、田中萬逸君たなかまんいつくんその
 人ひとである。反はん對たい黨たうは、ひやかしてやるが、その夜よ、も
 う一いち度ど怯おびかされた。眞夜中まよなかである。その頃ころ階下したに居ゐた學がく生せいさん
 が、みしくと二階にかいへ來くると、寢床ねどこだつた私の枕わたしまくらもとで大息おほいきを
 ついて、「變へんです。……どうも變へんなんです——縁側えんがはの手拭掛てぬぐひかけ
 が、ふはりと手拭てぬぐひを掛かけたまゝで歩行あるくんです。……トン／＼ト
 ン、たゝらを踏ふむやうに動うごきましたつけ。おやと思おもふと斜はすかひに、
 兩方りやうほうへ開ひらいて、ギクリ、シヤクリ、ギクリ、シヤクリとしな
 がら、後退あともとどりをするやうにして、あ、あ、と思おもふうちに、スー
 と、あの縁えんの突つきあたりの、戸袋とぶくろの隅すみへ消きえるんです。變へんだと思おも

ふと、また目の前へ手拭掛がふはりとして出て……出ると、トントントンと踏んで、ギクリ、シヤクリ、とやつて、スー、何うにも氣味の悪さつたらないのです。——一度見ってみて下さい。……矢來の猫が、田中君について来たんぢやあないんでせうか知ら。五月雨はじとくと降る、外は暗夜だ。私も一寸悚然とした。は、あ、此の怪談を遣りたさに、前刻狸を持出したな。——

「いや、敢て然うではない。

何う言ふものか、此のごろ私のおともだちは、おぼけと言ふと眉を顰める。

口惜いから、紅葉先生の怪談を一つ聞かせよう。先生も怪談は嫌ひであつた。「泉が、又はじめたぜ。」その

たがと
 唯一つの怪談は、先生が十四五の時、うらゝかな春の日中
 に、一人ひとりで留守留守すをして、茶の室ちやまにゐらるゝと、臺だいどころ所のお竈へつひが
 見える。……竈の角へつひかどに、らくがきの蟹かにのやうな、小ちひさなかけめが
 あつた。それが左の角ひだりかどにあつた。が、陽炎かげろふに乗るやうに、すつ
 と右の角みぎかどへ動うごいてかはつた。「唯たゞそれだけだよ。しかし今いまでも不
 思議しぎだよ。」との事ことである。——猫ねこが窓まどを覗のぞいたり、手拭掛てぬぐひかけが
 踊をどつたり、竈へつひかの蟹かにが這はつたり、ひよいと賽さいを振ふつて出でたやうであ
 る。春はるだからお子供衆こどもしう——に一寸ちよつと……化ばけもの雙すご六ろく。……
 なき柳川やながはしゆんえふ春葉はるは、よく罪つみのない嘘うそを言いつて、うれしがつて、
 けろりとして居ゐた。——「按摩あんまあ……鍼はりツ」と忽たちまち噛かみつきさう
 に、霜夜しもよの横寺よこでらの通りとほで喚わめく。「あ、あれはね（吼ほえ按摩あんま）」と

云つてね、矢來ぢや(い わし)と(おん なじ)に不思議の中へ入るんだ
 よ。「ふう」などと(げん くわん)關で焼芋だつたものである。花袋、
 玉茗(ぎよくめい)兩君(りやうくん)の名が、そちこち雜誌類(ざつしるゐ)に見えた頃、よそか
 ら歸つて來るとだしぬけに「きみ、聞いて來たよ。——花袋と
 言ふのは上州(じやうしう)の或大寺(あるおほでら)の和尚(をしやう)なんだ、花袋和尚(くわたいをしやう)。僧(そ
うじやう)
 正(ただ)ともあるべきが、女(をんな)のために詩人(しじん)に成つたんだとね。玉(ぎよく)
 茗(めい)と言ふのは日本橋室町(にほんばしむろまち)の葉茶屋(はぢやや)の若旦那(わかだんな)とさ。「この
(ひと)
 人のいふのだからあてには成らないが、いま座敷(ざしき)うけの新講談(しんかうだん)
(ひやうばん)で評判(てうけいし)の鳥逕子(とうけいし)のお父さん(とう)は、千石取(せんごくどり)の旗下(はたもと)で、攝(せつつ
のかみ)
 津守(つみ)、有鎮(いうちん)とかいて有鎮(ありしづ)とよむ。村山攝津守(むらやませつつかみ)有鎮(ありしづ)——邸(やしき)
 は矢來(やらい)の郵便局(いいうびんきょく)の近所(きんじよ)にあつて、鳥逕(とうけい)とは私(わたし)たち懇意(こんい)だ

つた。渾名を鳶の鳥逕と言つたが、厚眉隆鼻ハイカラのクリスチヤンで、そのころ拂方町の教會を背負つて立つた色男で……お父さんの立派な藏書があつて、私たちはよく借りた。——そのお父さんを知つて居るが、攝津守だか、有鎮だか、こゝが柳川の説だから當には成らない。その攝津守が、私の知つてる頃は、五十七八の年配、人品なものであつた。つい、その頃、門へ出て——秋の夕暮である……何心もなく町通りを視めて立つと、箒目の立つた町に、ふと前後に人足が途絶えた。その時、矢來の方から武士が二人來て、二人で話しながら、通寺町の方へ、すつと通つた……四十ぐらゐのとはち二十ぐらゐの若侍とで。——唯見るうちに、郵便局の坂

を^{さが}下りに見^みえなくなつた。あゝ不思議^{ふしぎ}な事^{こと}がと思^{おも}ひ出^だすと、三^{さん}十^{じゅう}幾^き年^{ねん}の、維新^{ゐしん}前後^{ぜんご}に、おなじ時^{とき}、おなじ節^{せつ}、おなじ門^{もん}で、おなじ景^{けしき}色^{しき}に、おなじ二人^{ふたり}の侍^{さむらひ}を見^みた事^{こと}がある、と思^{おも}ふと、悚^{ぞつ}然^{ぜん}としたと言^いふのである。

此^{これ}は少^{すこ}しくもの凄^{すご}い。……

初^{はつ}春^{はる}の事^{こと}だ。おぼけでもあるまい。

春^{はる}着^ぎにつけても、一^{ひと}つ艶^{つや}つぽい處^{ところ}をお目^めに掛^かけよう。

時^{とき}に、川^{かは}鐵^{てつ}の向^{むか}うあたりに、(水^{みづ}何^{なに})とか言^いつた天^{てん}麩^ぶ羅^ら屋^や

があつた。くだいやうだが、一^{いち}人^{にん}前^{まへ}、なみで五^ご錢^{せん}。……横^{よこ}寺^{でら}

町^{まち}で、お嬢^{ぢやう}さんの初^{はつ}のお節^{せつ}句^くの時^{とき}、私^{わたし}たちは此^{これ}を御^ご馳^ち走^{そう}に成^なつ

た。その時^{じぶん}分^{ぶん}、先^{せん}生^{せい}は御^ご質^{しつ}素^そなものであつた。二十^{にじふ}幾^{いく}年^{ねん}、尤^{もつと}

も私わたしなぞは、今いまもつて質素しつそである。此この段だんは、勤儉きんけんと題だいして、

(大久保おほくぼ)の印いんを捺おしても可よい。

その天麩羅屋てんぷらやの、しかも蛤鍋はまなべ三錢さんせんと云いふのを狙ねらつて、小栗をぐり、

柳川やながは、徳田とくだ、私わたし……宙外君ちうぐわいくんが加くははつて、大舉たいきよして押上おしあが

つた、春寒はるさむの午後ごごである。お銚子てうしは入いりが悪わるくつて、しかも高値たか

いと言いふので、式かただけ逃あつらへたほかには、町まちの酒屋さかやから、かけにし

て番ばんを口説くどいた一升入いつしやういりの貧乏徳利びんぼふどくりを誰たれかが外ぐわいたう套ちゆう (註ちゆう)。

おなじく月賦げつぷ……這個このまつくるのを一いつちやく着やくして、のそくと

歩行あるく奴やつを、先生せんせいが嘲あざけつて——月府玄蟬げつぷげんせん。)の下したへ忍しのばした

勢いきほひだから、氣焰きえんと、殺風景さつぷうけい推おして知しるべしだ。……酒氣しゆきが天てんじ

井やうを衝つくのではない、陰いんに籠こもつて疊たゝみの焼やけこげを轉ころげまはる。あ

つ爛かんで火ひの如ごとく惡あく醉すゐ闌けななる最さい中ちゆう。お連つれ様さまつ——と下した階たから
 素す頓とん興きな聲こゑが掛かると、「皆みんな居ゐるかい。」と言いふ紅こう葉えふ先せん生せいの
 聲こゑがした。まさか、壺つぼ皿ざらはなかつたが、驚す破は事ことだと、貧びん乏ぼ徳どく
 利りを羽は織おりの下したへ隠かくすのがある、誂てう子しを股またへ引ひ挾つんで膝ひざ小こ僧そう
 をおさへるのがある、鍋なべへ盃はい洗せんの水みづを打ぶ込ちこむのがある。私わたしが手
 をついて畏かしこまると、先せん生せいにはお客きやく分ぶんで仔し細さいないのに、宙ちゆう
 外わいさんも煙けむに卷まかれて、肩かたを四しかく角かくに坐すわり直なほつて、酒さけのいきを、
 はあはあと、専もつらピンと撥はねた髻ひげを揉もんだ。
 ————
 處ところへ……せり上あがつておいでなすつた先せん生せいは、舞ぶ臺たいにして
 も見みせたかつた。すつきり男をとこぶりのいゝ處ところへ、よそゆきから歸き宅たく
 のまゝの、りうとした着きつけである。勿もちろ論ん留る守すを狙ねらつて泳およぎ出だ

したのであつたが——揃そろつて紫星堂しせいだう（塾じゆく）を出でたと聞いて、その時とき々の弟子でしの懐くわい中ちゆうは見透みとほしによく分わかる。明進軒めいしんけんか島しまの金まきん、飛とび上あがつて常磐ときば（はこが入はひる）と云いふ處ところを、奴等やつらの近頃ちかごろの景氣けいきでは——蛤鍋はまなべと……當あたりがついた。「いや、盛さかんだな。」と、缺かけ火鉢ひばちを、鐵火てつくわにお召めしの股またへ挟はさんで、手てをかざしながら莞爾にっこりして、「後藤君ごとうくん、お樂らくに——皆みなも飲のみなよ、俺おれも割わりで一杯つばいやらう。」殿様とのさまが中間部ちうげんべ屋やの趣おもむきがある。恐おそれながら、此このと時とき、先生せんせいの風采ふうさい想おもふべしで、「懐中ふところはいゝぜ。」と手てを敲たたかるゝ。手てに應おうじて、へいと、どしんくと上あがつた女中ぢよちゆうが、次手ついでに薄暗うすぐらいからランプをつけた、釣つりランプ（……あゝ久ひさしいが今いまだつてランプなしには居ゐられますか。）それが丁ちやうど先生せんせいの肩かたの

上うへの見けん當たうに掛かつて居ゐた。面に瘡きびだらけの女ねえ中ちゆうさんが燐マツチ寸すを摺すつて
 點つけて、插さしばやをさすと、フツと消けしたばかり、まだ火ひのついた
 まゝの燃もえさしを、ポンと斜はすつかひに投なげた——（まつたく、お互たがひ
 が、所しよ帶たいを持つて、女ぢよ中ちゆうの此これには惱なやまされた、火ひの用よう心じんが悪わる
 いから、それだけはよしなよ。はい、と言いふ口くちの下したから、つけさ
 しのマツチをポンがお定さだまり……）唯と、先せん生せいの膝ひざにプスツと落お
 ちた。「女ねえ中ちゆうや、お手て柔やはらかに頼たのむぜ。」と先せん生せいの言こと葉はの下したに、
 忽かみわれたやうな顔かほをして、「惚ほれた證しよ據こだわよ。」やや、と
 皆みなが顔かほを見るみ。……「惚ほれたに遠ゑん慮りがあるものかツてねえ、
 ……てね、……ねえ。」と甘あまつたれる。——あ、あ、あ危あぶない、柵たな
 の破われ鍋なべが落おちかゝる如ごとく、剩あまつさへべたくと崩くづれて、薄うす汚よごれた

紀州ネルを膝から溢出させたまゝ、……あゝ……あゝ行つた！……
 男 振 は音羽屋（特註、五代目）の意氣に、團十郎の澁
 味が加つたと、下町の女だちが評判した、御病氣で面瘦
 せては、あだにさへも見えなすつた先生の肩へ、……あゝ嚙り
 ついた。

よゝつツと、宙外君が堪まらず奇聲と云ふのを上げるに連
 れて、一同が、……おめでたうと稱へた。

それよりして以來——癩癩でなく、憤りでなく、先生が
 いゝ機嫌で、しかも警句雲の如く、弟子をならべて罵倒して、勢
 當るべからざる時と言ふと、つゝき合つて、目くばせして、一人
 が少しく座を罷り出る。「先生……（水）……」「何。」「蛤

まなべ 鍋へおともは如何で。「馬鹿を言へ。「いゝえ、大分、女
 え 中さんがこがれて居りますさうでございまして。「傍から、「えゝ
 わづら 煩つて居るほどだと申します事ですから。「……かねて、おれを
 おもをんな 思ふ女ならば、目つかちでも鼻つかけでもと言ふ、御主義？であ
 つた。——

こうえふせんせい 紅葉先生、その時の態度は……

きくをとりのもとにとつて

采菊 東籬下、

いうぜんとしてなんざんをみる
 悠然 見南山。

大正十三年一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「春着《はるぎ》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春着

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>